

声符と古音

中村雅之

漢字の構成法の一つに「形声」と呼ばれるものがある。構成要素として発音を示す部分すなわち「声符」を含むタイプで、「清」「晴」「情」(声符は「青」)、「紅」「空」「貢」(声符は「工」)など、およそ漢字の8割がこの「形声」というタイプに分類される。

声符を同じくする漢字は当初(=漢字創生の頃)互によく似た発音であったに違いないが、「紅 hung」と「空 k'ung」のように現代音で読むと必ずしも「よく似て」はいない。それでも大雑把に捉えれば、「h」と「k'」は発音部位が似ており、「h」が昔は「g」であった可能性も含めて、大枠で声符としての意義を認めることはさほど困難ではない。

ところが中には一見ただけでは発音上の共通点を見出しがたい例も多くある。以下にいくつかを示そう。

- (1)「決」「快」／「割」「害」／「察」「際」
- (2)「格」「洛」／「監」「濫」／「謙」「廉」
- (3)「納」「内」／「立」「位」

まず(1)の「決」と「快」は現代音で互いに似ていないばかりか、中古音(隋唐時代の音)においても特に韻尾(「決-t」「快-i」)が全く異なる。中古音を反映する日本漢字音でも「決(ケツ)」「快(カイ)」である。しかし上古音(周代の音)でこれらが近似の音であったことは、詩経などで互いに押韻する関係にあったことから明らかである。そこでこれらの音をどのように復元するかが問題となる。「快」も上古においては「決」と同様に「-t」の韻尾をもっていたとする解釈が最も簡明であるが、その場合には、どのような条件で中古音における差異が生じたかを説明しなければならず、困難におちいる。そこでカールグレンをはじめ多くの研究者は“理論的”産物として「快」に「-d」という韻尾を与えている。つまり「-d」は上古においては「-t」と押韻可能であり、中古には「-i」に変じた何らかの音ということになる。(1)の他の例(「割-t」「害-d」／「察-t」「際-d」)も同様。

次に(2)であるが、「格(カク)」「洛(ラク)」／「監(カン)」「濫(ラン)」／「謙(ケン)」「廉(レン)」と日本漢字音で読んでもわかるとおり、中古音においては一方は「k-」で他方は「l-」である。カールグレンはこれを上古音における二重声母の反映とみなした。つまり、もとは「kl-」「gl-」のような二重子音を声母としてもっており、互いに近い響きを持っていたというのである。同様の方法で「pl-」「bl-」も想定されている。

最後の(3)は上に述べた(1)や(2)とはやや異なっている。(1)や(2)は声符を上古音の枠組みの中で捉えてもさほど矛盾は生じなかった。それゆえ清朝の考証学者たちは、詩経の押韻と声符の系列とを上古音研究の柱にしたわけである。ところが、(3)の「内」は上古において「納-p」と押韻せず、むしろ「-t」「-d」韻尾を有するグループに近い。つまり(1)の「快」と同様の性質を持っているのである。当然の帰結として「内」も上古音では「-d」韻尾を有するものと仮定されることになる。それがなぜ「納-p」の声符となっているのか？あるいは「内」は声符ではないのか？この問題に解決を与えたのはまたもカールグレンであった。彼は「内」が上古より古い時代に「-b」(すなわち「-p」と押韻可能な何らかの音)であり、上古音「-d」、中古音「-i」へと変化したものと仮定した。この説は「内」そのものが声符として「入-p」を内包していることとも矛盾しない。

さて、カールグレンは上古音よりも古い音を「内」には提示したが、「位」には示さなかった。そのために「内」があたかも例外的に上古音より古い音を知りえた例という印象を与えてしまった。董同龢『中国音韻史』は「-b」を「諧声時代」の音として「詩経時代」と区別したが、類例のまとめ方はやや乱暴であ

り、理論的裏づけにとぼしい。ともあれ本来声符とはその多くが漢字創生時の記憶を留めるものと考え
るべきであろう。いまなお声符は上古音研究の重要な柱となっているが、声符と上古音とを無批判に結
びつけることにはかなり慎重でなければならない。

ここでは声符が上古音よりも古い体系すなわち太古音(と仮に呼ぶ)を反映するものという立場にた
ち、太古音から上古音への変化の一端を想像してみたい。

まず、「内」に対してカールグレンが与えた音形を確認しておこう。(単純化して示す。なお「e」は「ə」
の代用。以下同じ。)

nueb > nued > nuei > nei

それぞれ左から順に太古音、上古音、中古音、現代音である。太古音の「-b」が「-d」へと変化した
のは、介音「-u-」との間に異化作用が生じたためと解釈される。上古・中古で「-p」韻尾を有して
いた「納 nap」は古来「-u-」介音を持たなかったためにその唇音韻尾を保存し続けたわけである。こ
の異化作用が「内」にのみ個別に生じたものではなく、一般的な音韻変化であったことは「位」の存在
によって明らかである。(「位」の太古音は中村による)

「立」 gliep > liep > liep > li

「位」 giueb > giued(>γiued) > γiuei > uei

ここでも要点は唇音韻尾「-b」が異化作用によって「-d」へと変化する点にある。「内」「位」はともに
異化作用という同じ原則によって変化したとみなすことが可能である。したがって「-ueb」という音形は
「内」のみが有していたものではなく、太古音を特徴付ける一つの音形とみなしてよい。カールグレンは
「位」に「giueb」という段階を設けず、したがって構成要素「立」を声符とは認めなかった。『説文解字』も
「位」を会意字として扱っている。しかし、「内」と「位」の平行性を見る時、そこに一定の音韻変化を認
めないわけにはいかない。その意味で、漢代の注釈家が『周礼』や『春秋経』において「神位」「即位」
の語を古いテキストが「神立」「即立」に作ることを指摘し、「立読若位(立は位のように読む)」と記して
いるのは真に信頼に足ると言わねばならない。古くは「立」の字形が「くらい」の語をも示した(いわゆる
仮借である)が、後に「たつ」と区別するために「位」の字形が生まれたものであろう。本字と仮借字を区
別するために一方に意符を加えるというのが、形声字成立の常道である。

このようにして「-ueb>-ued」の変化が太古音から上古音にかけて生じたのであるが、この変化が
起点となって、介音「-u-」の有無にかかわらず「-b」韻尾全体が「-d」へと変化したと考えられる。そ
れは次のような関係において認められる。(以下もはなはだ簡略化した表記。)

「盍」 gap > gap > γap > he

「蓋」 kab > kad > kai > kai

「葉」 diap > diap > iep > ie

「世」 tiab > śiad > śiei > šī

カールグレンは「蓋」については「kab」の段階を認めているが、「世」については「tiab」を認めていな
い。しかし「世」はもと「3枚の葉」を描いた象形字であって、「葉」の原字というべきものである。それが
「世代・世の中」の意に仮借されたために、「葉っぱ」の字形には「世」に意符として「木」が加えられ、さ
らには「草」が足されたものと解釈できる。形声字の通例に合うのである。

以上を要するに、太古音においては「-b」韻尾を有する一群のグループがあったが、初めは異化作
用によって「-ueb>-ued」の変化が起こり、それを契機として全体に「-b>-d」の変化が生じたもの
と考えられる。結果として上古音には「-b」韻尾は存在しないことになった。このような変化は、実は漢
語音韻史においては全く同様の形で近世期に起こっている。「-m>-n」の変化である。中古音まで
体系の中に存在した「-m」韻尾は、元代にはまず唇音声母を有する音節において「-n」に変じた。異
化作用である。その後、遅くとも16世紀初頭までには全ての音節において「-m>-n」の変化が終了
している。つまり、太古音から上古音において異化作用を契機として「-b>-d」の変化が起ったこと

は、漢語音韻史においてはごく自然にありうることと見なすことができるのである。

この「-b」のほかにもう一つ太古音に特徴的なのはすでに触れた二重声母である。上の「立」にも二重声母「gl-」が想定されているが、これは声符を共有する「泣」との関係において導かれる。あるいは「位」にも二重声母を想定できるかもしれないが、議論が煩雑になるので「g-」にとどめてある。

問題はこの二重声母が上古音にもあったかという点である。これまでは声符の系列と詩経の押韻とが同一の体系であるという前提で研究が進んできたので、上古音に二重声母があることになっていたが、さきに見た「-b」で明らかのように、太古音と上古音は区別すべき体系であり、声符は上古音ではなく太古音の研究にこそ資するものである。二重声母は主に声符の研究から導き出されたものであるから、とりあえずは太古音の特徴としてとらえるべきであろう。何九盈氏はその著『上古音』（商務印書館 1991）において詩経時代には二重声母はなくなっていたと考えており、私自身もそう感じている。確実な根拠があるわけではないが、以下に述べるようなことなどからの印象である。

かつて藤堂明保氏が古代の風神である「飛廉」について論じたことがある（「鳳凰と飛廉について」）。「飛 p-廉 l-m」とはすなわち「風 pl-m」の異形であるという論で、朝鮮語で風を意味する「param」という音形とも関連して古代の東アジアにおける風神信仰について述べたものである。「風 pl-m」の音形は声符を共にする「凡 b-m」「嵐 l-m」（←中古音）などから導かれる。ここで、周代になぜ「飛廉」という語が存在するのかという点に私は興味を引かれる。周代にも「風 pl-m」という音形が存在していたのであれば、「飛廉」という二音節の語は不要だったのではないか。かつて字形においても音声においても「風神」を意味していた「風 pl-m」は、周代になると自然現象としての「風 p-m」と土俗信仰の対象としての風神たる「飛 p-廉 l-m」とに分離したのではないか。その背景には太古音の二重声母が上古音において消滅（単子音化）したことが考えられるのではないか。これが私の想像である。

一般に現在想定されている上古音の体系はとりわけ子音の体系においてあまりにも複雑である。もちろん我々がそのような体系に慣れていないために複雑に見えるという面もあろうが、それにしても上古音から中古音への変化は劇的というより非常識にさえ思える。そのような違和感を回避する一つの方法が太古音の解明であると考え。つまり現在想定されている上古音の複雑さのいくつかは上古音のものではなく、太古音のものと考えることによって、漢語音韻史はだいぶ常識的になるのではなかろうか。二重声母が上古音になかったとする見解はそのような希望的観測を含むものでもある。

以上、本稿では声符を手がかりとして太古音と上古音をふるい分ける作業を試みた。二重声母についてはまだ考慮を重ねる必要があるが、「-b」韻尾については要点を尽くしたつもりである。声符の検討は時には個々の漢字の成立時期を探る手段にもなる。例えば、「世」は上に述べたとおり、太古音で「tiab」、上古音で「siad」のような音であったと想定しうるが、では「泄」はどう考えるべきであろうか。この字は一般に上古音「siat」、中古音「siet」のように考えられている。この語が太古音の時代にも存在したとすれば、やはり「siat」と想定さえざるをえないが、それでは「世」を声符とすることと符合しない。そこでこの語は太古には「泄」の字形を持っていなかったと考えなければならない。「世」が「siad」という音形を獲得した上古音の時代に、それを声符とする「泄 siat」が生まれたと考えるのが最も理にかなっている。このように、声符の研究は個々の漢字の成立についても大いなる武器になりうるのである。

最後に補足を一つ。文中ではカールグレンらの見解にしたがって理論的な「-d」という表記を用いたが、何九盈氏は「-d」の正体は「長母音+t」であったと考えている。つまり上古音において入声（「短母音+t」）と押韻していた「快」「害」「際」「内」「位」など「長母音+t」は、その母音の長さの故に韻尾の閉鎖を失い、去声に合流したということであろう。証明するのは難しいが、この考えは魅力的である。